

英語学習者への学習方略指導* (リメディアル教育を必要とする学習者への指導を中心として)

小山 政史^{*1}

Learning Strategies for Learners of English (Learning Strategies for Learners Who Need Remedial Education)

Masashi KOYAMA^{*1}

^{*1} Organization for Fundamental Education

The day is approaching when the Olympic and Paralympic Games will be held in Tokyo. To welcome people from abroad, the Japanese government has been working on various improvements to make a better environment for them. To improve Japanese people's English ability or skills is one of the government's main targets to achieve. However, as some data on Japanese people's English ability show, it cannot be said that Japanese people have had enough ability or skills to use English well. Therefore, in this paper, I will look for a better way to improve learners' English ability or skills, highlighting learning strategy of English. In addition, I aim to find what strategies teachers should use to teach learners who are not good at and do not like learning English, or learners who need remedial education.

Key Words : Learning Strategy, Remedial Education, Motivation, Learning Style

1. 緒 言

平成 32 年(2020)東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが決定しており、現在その準備が着々と進められている。このような世界的なイベントでは日本国外から多くの人々が訪れることが予想され、日本政府は、その対策の一環として、観光案内や誘導案内の標識を英語表記にしたり(例:国会前を Kokkaimae から National Diet と表記)、飲食店でも英語等の多言語メニューの作成を奨励するなど、日本に来られる方がスムーズに生活できるよう配慮を促している。それと同時に文部科学省では「東京オリンピック・パラリンピックを迎える 2020 (平成 32) 年を見据え、小・中・高等学校を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める。並行して、これに向けた準備期間の取組や、先取りした改革を進める。」として、英語教育に力を入れることを宣言している。

一方、日本人の英語能力がどれほど向上しているかには疑問符をつけざるを得ない。その一例として、文部科学省が高校 3 年生を対象に行った、平成 27 年度英語学力調査の結果において、Common European Framework of Reference for Languages¹(ヨーロッパ言語共通参照枠、以下 CEFR)の「聞くこと」の分野では A1 レベルが 73.6%、A2 レベルが 24.2%、「話すこと」の分野では A1 レベルが 89.0%、A2 レベルが 9.8%となっている。また、2014 年度 TOEFL®テストにおける国別スコアを見てみると、日本は 70 点(Reading : 18 点, Listening : 17 点, Writing : 17 点, Speaking : 18 点)で、アジア 31 か国中 27 位に位置している。これらのことから、日本人全体の英語能力が総じて低いと言わざるを得ない²。

日本人全体の英語能力がそれほど高くないことは、日本の大学生の英語能力にも表れている。小磯(2015)は大阪商業大学が実施する日本版総合的社会調査(Japanese General Social Surveys, 以下 JGSS)の 2002 年と

¹ 投野(2013)によれば、Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠)とは、言語コミュニケーション能力を、A (初級)「基礎段階の言語使用者」、B (中級)「自立した言語使用者」、C (上級)「熟達した言語使用者」の 3 つに分類し、それぞれに 2 つの下位区分を設けた 6 レベルで言語コミュニケーション能力を評価するものである。

² 寺沢(2015)は TOEFL®の点数が他の国よりも低いことを根拠にして「日本人は英語下手」とするのは社会調査としての妥当性が低いと述べているが、同時に日本人の英語(能)力が国際的に見て低いレベルにあることも記述している。

* 原稿受付 2017 年 2 月 28 日

^{*1} 基盤教育機構

2010 年における日本人の英語能力に関する調査をもとに両年における年代・性別に関する英語能力の調査結果を分析している。この中で、最終学歴が高等教育である 20-34 歳までの被験者では、英語能力が 2002 年に比べて 2010 年は男女ともに下がっていることを示している。小磯はこの原因の一つとして「大学の大量化による大学生の学力低下が問題になっているが、英語力に関してもその傾向が伺える」としている。

しかしながら、これだけ国際化が進み、多くの企業が国外に支社や工場を構え、そこで多くの日本人が働いている現在³、日本人の中にも高度な英語能力を持ち、国際的な場で活躍している人が数多く存在することは想像に難くない。また、その中には特に学生時代に留学などをしなくてもネイティブ・スピーカーと同等の英語力を身に付けた者も含まれている。彼らのような英語能力の高い人たちがどのようにしてその能力を身に付けたのかを探ることは、今後の英語学習のモデルケースの一つになると言える。

そこで本稿では「学習者がどのようにして英語を勉強しているか」を表す「学習方略」に焦点を当て、これまでの先行研究の結果から、英語能力の高い日本人英語学習者の学習方略と、英語能力が低い日本人英語学習者のそれとを比較し、後者（特にリメディアル教育を必要とする大学生）に対してどのような英語学習方略を指導していくかについての指針を探ることとする。

2. 英語学習方略とその効果

2.1 英語学習方略 (Oxford 1990)

筆者はその職業柄、学生から「英語を習得するにはどうやって勉強をすればよいですか」という質問を受けることがたびたびある。そのたびに学生の話聞き、ある学習方法をやってみるように促すと、それを契機にして英語能力を伸ばす学生もいる一方で、その逆の場合もある。こちら側が提示した学習方法が相談に来た学生にうまく機能しなかった場合、彼らから聞く言葉の一つの例として「先生が示してくださったやり方は自分には合いませんでした」というものがある。言い換えれば、人によって学習方法には合っているものとそうではないものがあることが分かる。

外国語教育学の分野においては、学習者がとる学習方法・行動の中で、学習を容易にしたり、より効率的なものにするものを学習方略(Learning Strategy)と呼ぶ。学習方略の定義として最もよく用いられるものに(1)がある。

- (1) ... learning strategies are operations employed by the learner to aid the acquisition, storage, retrieval and use of information... specific actions taken by the learner to make learning easier, faster, more enjoyable, more self-directed, more effective, and more transferable to new situations.

—Oxford (1990:8)

Oxford(1990)は学習方略の内容として、「直接方略」と「間接方略」の 2 つに分け、さらにそれらをそれぞれ 3 つずつに下位分類し、合計 6 つの方略を提案している。それらを次の表(Table 1)にまとめる。

Table 1. Oxford による学習方略の分類

直接方略	間接方略
記憶ストラテジー	メタ認知ストラテジー
認知ストラテジー	情意ストラテジー
補償ストラテジー	社会的ストラテジー

³海外在留邦人数調査統計によれば、平成 27 年 10 月 1 日現在、日系企業の数 は 71,129 社であり、10 年前の平成 17 年の約 2 倍となっている。

直接方略は「言語習得に直接的に影響を与える方略」とされており、具体的には(2)のようなものがある。

(2) 直接方略

- a. 記憶ストラテジー(memory strategy)－効率よく記憶するためのストラテジー
(例) 語呂合わせ、類義語をまとめる、繰り返し反復する 等
- b. 認知ストラテジー(cognitive strategy)－言語材料の分析、推論などのためのストラテジー
(例) 演繹的推論・分析、母語への翻訳、相手に確認する 等
- c. 補償ストラテジー(compensation strategies)－学習者が目標言語を理解したり、発話したりするときに足りない部分を補うために用いるストラテジー
(例) 未知語を文脈から類推する、ジェスチャーを用いる、別の言葉で言い換える 等

直接ストラテジーの中で、日本の英語教育でよく用いられているのは(2a)と(2b)である。特に、英語語彙の学習においては、英語とそれに対応する日本語を「繰り返し何度も書いて覚える」ことや「語呂合わせなどを用いて覚える」こと、最近では接頭・接尾辞などの語形成の知識を用いて記憶を高めるなどのストラテジーが用いられている。また、リーディングにおいては大学入試の影響からか、構文分析を行った後、和訳をすることで英文の理解をするというのも一つの認知ストラテジーの表れである。

他方、間接方略は「言語習得を間接的にサポートする方略」とされており、具体的には(3)がある。

(3) 間接方略

- a. メタ認知ストラテジー(metacognitive strategy)－学習者が自己の学習過程を調整するのに役立つストラテジー
(例) 学習計画を立てる、目標を設定する、自己評価をする 等
- b. 情意ストラテジー(affective strategy)－感情、態度、動機、価値などの情意的要素をコントロールするストラテジー
(例) 不安を軽減する、自分を褒める、音楽を使用する 等
- c. 社会的ストラテジー(social strategy)－社会的インタラクションを通して目標言語の学習を促進するストラテジー
(例) 説明や確認、修正をしてもらうために教師に質問をする、他の学習者と協力する 等

間接ストラテジーは英語学習の内容には関係しないが、学習そのものに付随する現象のストラテジーである。一例をあげるならば、普段は英語学習に対して非常に前向きな学習者であっても、無計画に勉強してしまったり、何か嫌なことがあり気持ちが落ち込んでいるといった場合には、学習の効率が上がらないことがある。また、学習している最中に疑問点が出てきた場合、教師や他の学習者に質問をして疑問を解決できなければ、学習の効率がよいとは言えない。よい言語学習者になるには、学習においてこういった問題を避けるように方略を駆使し、言語学習を効率的なものにすることが必要である。

2.2 英語学習方略を用いる効果

2.1 で、直接・間接合わせて6つの英語学習方略について概観したが、これらのストラテジーのうちのいくつかを用いたことにより学習の効果が高まったことを示すものに、Yamamori, Isoda, Hiromori, & Oxford, (2003)がある。Yamamori らは日本の中学生を対象に、英語学習における学習方略使用、動機づけ、学習成果の関連を調査した。この研究では、事前に予備調査を行い、英語の家庭学習で行っている学習方略として、「教科書の本文を繰り返し読んで読む」「繰り返し書いて覚える」「教科書の訳を作る」「授業を思い出しながら復習する」「辞書を引いて単語の意味を調べる」の5つがあることを確認した。これら5つのうち、最初の3つは(2a)に、残りの2つは(2b)にあたる。これらの5つに加え、学習方略を全く使わないことを意味する「どのように勉強したらよいか分からない」という選択肢を加えた6つを被験者に提示し、学習方略の使用実態を6段階（「1 まったくあてはまらない」～「6 とてもよくあてはまる」）で調査した。動機づけについては「私は英語の授業に熱心に参加している」「私

は英語が得意になりたい」などの4項目を方略と同様に6段階の評価で測定した。また、学習の成果として期末試験の結果（100点満点）を用いた。

その結果をまとめると、次の表(Table 2)のようになる。

Table 2. 英語学習における学習方略使用、動機づけ、学習成果の関連

生徒の グループ	学習動機 (最小値 4～ 最大値 24)	英語の家庭学習で行っている こと（学習方略）	学習方略使用の 平均値 (最小値 1～最大値 6)	期末試験の得点 (最小値 0～ 最大値 100)
1 中動機・ 学習方略 多様型	17.1	教科書の本文を繰り返し読む 繰り返し書いて覚える 教科書の訳を作る 授業を思い出ししながら復習する 辞書を引いて単語の意味を調べる どのような方法で勉強しているかわからない	3.4 2.9 4.5 3.8 3.8 2.5	76.5
2 中動機・ 学習方略 不明型	17.3	教科書の本文を繰り返し読む 繰り返し書いて覚える 教科書の訳を作る 授業を思い出ししながら復習する 辞書を引いて単語の意味を調べる どのような方法で勉強しているかわからない	3.0 2.3 2.2 4.6 3.7 4.6	57.5
3 低動機型	14.3	教科書の本文を繰り返し読む 繰り返し書いて覚える 教科書の訳を作る 授業を思い出ししながら復習する 辞書を引いて単語の意味を調べる どのような方法で勉強しているかわからない	2.5 2.0 2.2 3.0 2.7 1.4	56.0
4 高動機・ 学習方略 選択型	19.5	教科書の本文を繰り返し読む 繰り返し書いて覚える 教科書の訳を作る 授業を思い出ししながら復習する 辞書を引いて単語の意味を調べる どのような方法で勉強しているかわからない	3.2 1.3 4.9 4.9 5.2 1.6	83.1

—廣森(2016:120)より

この表から読み取れるのはグループ1（中動機学習方略多様型）とグループ2（中動機学習方略不明型）の学習成果に19点もの差があることである。両グループとも動機づけはほぼ同じ数値を表しているにも関わらず、「どのように勉強したらよいか分からない」という項目において前者は2.5と低い、後者が4.6と高い。つまり、自分自身で意識的に方略の使用をすることで成果に差が出ていると考える証拠の一つとなる。

3. 英語力の大小に見る方略使用の違い

この章では竹内(2000)で議論されている、大学生に対する学習方法に関するアンケート調査から、学力上位の学生と学力下位の学生が用いている学習方略の違いについて見る。

3.1 アンケートの内容と実施方法

竹内(2000)で行われている実験は、英語を専門とする日本人大学4年生を対象として、詳細な学習回顧記録を書かせ、これを英語の熟達度別グループに分けて、分析するという研究を行ったものである。被験者は、日本の大学の同一学部同一学科で英語を専攻する4年生153名（21-23歳）であった。性別による影響が出ないよう女性のみを被験者としている。英語能力を測るテストは40点満点であり、平均点は25.52点であった（ちなみに英語を専攻していない学生に同テストを実施したが、平均点は18前後であった）。このうち得点が30点以上であったものを英語力上位群、21点以下を英語力下位群とした。全153名のうち、上位群・下位群ともに24名の被験者から構成されることとなった。また、英語運用能力を証明する何らかの資格（英検準1級以上）かテスト・

スコア（TOEIC／TOEFL の高得点）を上位群では 19 名が取得していたが、下位群にはそのようなものを持つものがいなかったことも上位群と下位群の英語能力が明らかに異なっていることの証拠の一つと言える。

学習回顧記録のデータ収集については「言語レポート法」を採用している。この方法では、被験者に対して学習過程やタスク解決の過程を被験者に言語化させ、報告させるというものである。

3.2 英語力上位群と下位群の学習方略の違い

竹内(2000)は上位群と下位群のレポートを比較すると「記述量」の違いがあることに言及している。また内容についても上位群のレポートはより具体的な学習方法が詳細に記載されているが、下位群のレポートには具体的な内容に乏しく、全体的な記述量が少ないと述べている。以下にその例を挙げる。

(4) 上位群の学習方略のレポート例（下線およびカッコ内のストラテジー表記は筆者）

- a. 英語の使用機会を増やすようにする（記憶ストラテジー，社会的ストラテジー）
 - ・覚えたものを定期的に繰り返した。
 - ・授業で、積極的に英語で質問し，話す機会を持つようにしている。
 - ・意図的にネイティブの先生の授業をとった。
- b. 時間を上手く使い，目標を達成する（メタ認知ストラテジー）
 - ・授業外で一日とか一週間とかいう単位で計画をたて，やる範囲をきめ，毎日一定量をコンスタントにこなす英語の学習にさくように努力している。
 - ・英検 1 級突破を目標として，週単位に計画的にやってきた。
- c. 「声に出して読む」から「分析的に読む」（認知ストラテジー，補償ストラテジー）
 - ・丁寧に音読をすることが会話などにも役立った。
 - ・受験の時に，やっこしい文章でも細かく分解しながら読めば読めることが分かったので，読むのが楽になった。
 - ・読んでいてわからない単語がある時には，とりあえずマークを付けておき読み続ける。読み終わっても意味が分からない単語で何回も出てくるのは，あとで辞書を使い確認するようにしている。
- d. 基本構文の暗記がカギ（記憶ストラテジー，認知ストラテジー）
 - ・日常よく使う表現や基本的な構文を，繰り返して声に出して覚えた。口に出すだけでなく，紙に何度も書いて覚えた。
 - ・覚えた表現の一部をいろいろと変えて，口に出して繰り返してみた。滑らかになるまで練習すると意識しなくても口が動いてくれるので楽しい。

(5) 下位群の学習方略のレポート例（下線およびカッコ内のストラテジー表記は筆者）

- a. 具体性・計画性のなさ（メタ認知ストラテジー）
 - ・大学へ入ったのをきっかけに，ラジオの「ビジネス英語」などに挑戦してみた，結局 3 カ月も続かずに面倒でやめてしまった。
 - ・定期的には何もやっていない。実際，授業の勉強以外，何もしていないようだ。
- b. 自発性が少なく，目標が大きすぎる（メタ認知ストラテジー）
 - ・やることはやったが，学校で半ば強制されないと勉強してこなかった。
 - ・新しい表現は無理してまで使わない。自分のよく知っている範囲の単語や熟語で確実にやり取りができるのなら，それでよい。
- c. リストで覚える，推測する（記憶ストラテジー）
 - ・知らない単語は書き出して，リストにして意味を覚えました。
 - ・知らない単語は単語帳に意味をすべて書き，ひたすら覚えていきました。
 - ・読む時はわからない単語は推測する。それで大体の意味がわかれば，辞書で調べたりはせず，どんどん先を読む。

(4), (5)のそれぞれの内容を比較すると、上位群の被験者は6つの学習方略をすべてというわけではないが、個々にうまく利用し、成果をあげている一方で、下位群の被験者は学習方略をうまく利用することができず、半ばやられている状態で、やみくもに勉強するなど、特に間接ストラテジーの一つである「メタ認知ストラテジー」が上手く使えていないことから、2.2 で見た「どのように勉強すればよいか分からない」と同様の状態に陥っていると考えられる。このような結果からも、英語を学習する際に学習方略を用いることで英語能力を高めることができることが確認できる。

4. リメディアル教育を必要とする学生の学習方略

3章で概観した竹内(2000)の調査は、学習者を英語能力上位群と下位群に分け、それぞれの学習者が用いる学習方略が異なっていることが能力に反映されていることを表しており、筆者も大いに参考にしているところである。しかしながら、その被験者はあくまでも「英語を専攻としている学生」に限られており、しかも4年生であるということは、大学での4年間を英語の勉強に費やしてきた学生の中という、極めて限られた状況における調査結果であることは否めない。

1章で述べたように、日本人の英語能力が、高校3年生段階でそのほとんどの生徒がCEFRのA1～A2レベルである。同時に、日本人大学生の英語能力が過去に比べて下がっている原因の一つは大学進学率の上昇による学力の低下である。それならば日本人全体の英語力を向上させるために、本当に光を当てるべきは英語を専門としない、むしろ英語が苦手であるという学習者、つまりはリメディアル教育を必要とする学習者である。彼らの英語能力を向上させるにはどのような学習方略をまずは用いるべきかについて本章では考察する。

4.1 リメディアル教育を必要とする学習者

日本において少子化が進むなか、大学（短期大学を含む）進学率は上昇の一途をたどり、平成27年5月1日のデータでは（過年度生を含む）大学進学率は55.1%と過去最高を記録している。一方、それだけの生徒が大学に進学することにより、その背後には極めて憂慮すべき低学力の大学生が数多く生まれることになったことは否めない。そこで、大学で求められる学力に達していない学生のために補完的授業を行うのがリメディアル教育である。

元来、リメディアル(Remedial)とは日本語で「補修の」の意を表す。つまり、本来は中学校や高等学校で学習済みである英語能力の土台となるべき学力にしっかりと身に付いていないため、それを補うことがリメディアルである。合田(2011)は大学生の英語学習におけるリメディアル教育内容について(6)のように言及している。

- (6) これらは、基礎的な学力、例えば中学英語の文法がどこまで身に付いているかとか、いないとかいう学習内容に重点が置かれていることが多いようである。

—合田(2011:16)

大学生に対して中学英語の文法という基準を用いることに違和感を覚えるかもしれないが、筆者自身の大学における指導経験からもあながちこれを真っ向から否定する要素を見つけることは難しい。実際に筆者の勤務校で行った学力検証試験においても、中学英語を理解していないと目される学生が30%程度見受けられる。この程度の学力しか持たない学生に対して、補修のための教育を行わないことはむしろ大学教育の崩壊を招く恐れさえあるとすら感じさせる。

一方、酒井(2011)は大学でリメディアル教育を行うことについて(7)のように述べている。

- (7) 大学でリメディアル教育を施しても、卒業後に仕事に使えるわけでもないような英検3級レベルの英語力がせいぜいである。

—酒井(2011:11)

確かに、大学卒業までに身に付いた英語能力が英検 3 級程度、すなわち中学卒業レベルであるとすれば、大学で英語を学ぶ意義が問われかねない。リメディアル教育を必要とする学生が大学卒業レベル、もしくは少なくとも仕事で使えるレベルにまで英語能力を伸ばせるような方法を検討することが急務である。

4.2 リメディアル教育を必要とする学生のための英語学習方略

牧野・平野(2015)では、英語を専攻していない大学生を対象に英語学習の意識調査を行っている。被験者は私立大学に通う英語非専攻の大学生 229 名である。まず被験者の基本情報として、学年、英語に対する好感度、英語力、英語学習の目的について尋ねている。その結果として、英語に対する好感度を「好き」「嫌い」のどちらかで選ばせているが、被験者のうち 66.8%が「嫌い」と答えている。英語力についても TOEIC スコアが 300 点以下の学生が 70%以上を占めている。また、英語学習の目的として「単位を取るため」というのが 56.8%と半数以上を占めている。このことから、被験者が決して英語に対して積極的な姿勢を持っているとは言えないばかりか、英語力もそれほど高くない、すなわちリメディアル教育を必要とする学生であることが分かる。

それらの学生に対する牧野・平野の調査結果において「英語に対する学習意欲を高める要因」のうち学生からの肯定的な意見として取り上げられてものが 11 項目ある。

(8) 英語に対する学習意欲を高める（肯定的）要因

- a. 教師が信頼できると思うと学習意欲が高まる
- b. 勉強する方法が分かると学習意欲が高まる
- c. メリハリのある授業は学習意欲が高まる
- d. 授業で学んでいることが将来役に立つと思うと学習意欲が高まる
- e. 自分がしたいと思っていることを授業でする機会があると学習意欲が高まる
- f. 学習する目標がわかると学習意欲が高まる
- g. 教師の熱意を感じると学習意欲が高まる
- h. 教師が自分の英語力を理解してくれていると感じると学習意欲が高まる
- i. 英語を使う場面があると感じると学習意欲が高まる
- j. 教科書がおもしろいと感じたとき学習意欲が高まる
- k. グループワークで英語を学ぶと学習意欲が高まる

—牧野・平野(2015:46)（下線筆者）

これら 11 項目のうち、下線を引いた部分について学習方略にあてはめると、(8b, f)はメタ認知ストラテジー、(8c, d, i, j)は情意ストラテジー、(8k)は社会的ストラテジーの範疇に入る。つまり、間接ストラテジーに関するものである。3.2 で下位群の学習方略のレポートについて見た際、認知ストラテジーが上手く使えていないことが、英語能力があまり向上していない一つの原因であることを述べたが、これとも合致する結果である。

これらのことから、リメディアル教育を必要とする学習者にとっては、まず学習方略のうち、間接ストラテジーを上手に用いるよう指導することが最優先であると言える。

5. 結 言

本稿では、日本人英語学習者の現状の英語能力を鑑み、その能力を少しでも上げるべく、英語学習方略に焦点を当て、どのようなストラテジーをもって（特にリメディアル教育を必要とする）学習者に英語学習を行わせるべきかを論じた。

今後、オリンピック開催の有無に関係なく、グローバル化が進むにつれ、外国語（特に英語）教育が盛んになると考えられる。その一方、少子化の中で大学進学率が上昇すれば、リメディアル教育を必要とする学習者の割合が増えていくことが予想される。本論文がそのような学習者がグローバル化に対応できるような英語能力を身に付けるための指導法の研究の一助になることを願い、筆を置く。

文 献

- 小磯かおる (2015) 「日本人の英語力の変化とその背景ーJGSS 累積データを基にー」『大阪商業大学論集 第 10 巻 4 号』 p17-25.
- 合田美子 (2011) 「リメディアル教育と自己調整学習」『英語教育』2 月号, p16-18.
- 寺沢拓敬 (2015) 『「日本と英語」の社会学ーなぜ英語教育論は誤解だらけなのか』 研究社, 東京.
- 投野由紀夫 (2013) 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』 大修館書店, 東京.
- 廣森友人 (2015) 『英語学習のメカニズムー第二言語習得研究にもとづく効果的な英語勉強法』 大修館書店, 東京.
- 牧野真貴, 平野順也 (2015) 「英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編 6(1)』 p39-55.
- Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know* Newbery House. New York.
- 酒井志延 (2011) 「リメディアルと向き合う」『英語教育』2 月号, p10-12.
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学ー第二言語習得論とは何か』 岩波新書, 東京.
- 竹内理 (2000) 『より良い外国語学習法を求めて』 松柏社, 東京.
- Yamamori, K., Isoda, T., Hiromori, T. & Oxford, R. (2003) “Using cluster analysis to uncover L2 learner differences in strategy use, will to learn, and achievement over time.” *International Review of Applied Linguistics*, 41, p93-105.

(平成 29 年 3 月 31 日受理)